

人材サイクルの実現で目指す デザイン志向の戦略的地域づくり

山上の都から日本の十字路へ

南信州地方の中核都市・長野県飯田市は、近世の幕藩時代には東山道などを經由し、京や江戸を発信源とする最新文化が常に流入する「山上の都」と呼ばれていたという。同時に三州街道・遠州街道および天竜川の水運などによって太平洋側とも緊密に結ばれていた。

置かれた地理的環境もさることながら、絶えず流入してくる最新の文化を十分に消化し、独自の地域文化へと紡ぎ上げていった「飯田の特質」は、その教育熱心な（学習を好む）地域性によるところが多かったようだ。現在も長野県はしばしば教育県と呼ばれ、教育熱心な土地柄に定評があるが、江戸時代の記録に既にその特質が現れている。

例えば寺子屋設置数（人口比）において、信州は全国トップクラスだった。中でも城下町・飯田の寺子屋設置数は群を抜いており、それ

は現在の飯田市を中心市とする南信州地方全域の傾向でもあった。文化を受け入れる土壌が深く豊かに準備されていたのだろう。

ところが近代以降に交通網の急速な整備が進むにつれ、近代以前に培われたわが国の地理的、文化的環境条件は、随所で有名無実化していく。端的には鉄道や道路建設をしやすい地理的環境条件を持つ地域に新たな都市圏が築かれる例が続出。さらに近年の高速交通網時代を迎えるに至って、企業立地環境などにも大きな格差が生まれる。付随して新たな交通網、高速交通網から漏れた都市は次第に人口減少化への道を歩む傾向が目立つようになっていく。

飯田市もその例に漏れず、昭和25年の約11万4000人をピークに人口の増減を繰り返しつつ、長期的には漸減傾向が続き、現在は約10万5000人（平成26年2月末時点）に止まっている。

高速バスによるアクセスでは東京から

まきのみつお
牧野光朗
飯田市長



約4時間、大阪から約4時間、名古屋から約2時間、長野市から約3時間。本数の少ない鉄道（中央線経由）では東京から約4時間半掛かる（現実的には東京からも大阪からも名古屋まで新幹線を利用し、名古屋から自動車を利用するのが最速とされる）。

長年にわたって高速交通網の波に乗れずにいた飯田市が、今大きく変容しようとしている



日本のチロルとも呼ばれる「下栗の里」の秋

る。昨年9月、平成39年開業を目標とし、今年度中に着工が予定されるリニア中央新幹線の中間駅の一つに飯田市が選ばれたのだ（正確なルートは品川〜相模原〜甲府〜飯田〜中津川〜名古屋）。リニア中央新幹線の開業後は、東京（品川）〜飯田市が何と45分程度、名古屋〜飯田市が25分程度で結ばれることになる。さらに長年の懸案となっていた三遠南信自

で復活することになります。日本の中央部に位置する南信の地に、最先端の高速交通網による文化的・経済的な十字路が新たに誕生することになるわけです」
 そう語る牧野光朗・飯田

リニア時代を前提とする産業づくり

動車道（延長約100km）についても、今年3月にルート中最難関とされる（仮称）青崩トンネル（長野県・静岡県の県境）の工事が着手され、長野県側は現道活用区間も含め全線にわたって工事着手された。この三遠南信自動車道の整備が完了すれば、飯田市から浜松市との時間距離は飛躍的に短縮されることとなる。

「これによって江戸時代に山上の都と呼ばれ、江戸や京の文化が集まり、陸運や水運で太平洋側とも結ばれて栄えた飯田は再び、リニア中央新幹線で東西の大都市圏と直結するとともに、三遠南信自動車道によって中央構造線に沿った南北の大動脈までが、よりパワーアップした形で復活することになります。



暴れ川の異名もある天竜川は南信地方の自然を形成する大動脈



昭和22年の飯田市大火からの復興の象徴である中心市街地を貫く「りんご並木通り」



飯田産業センター 1Fにある名産品売り場

市長は、「時代の転換点ともいうべき大きな変化」を迎えている現状とは裏腹に、非常に冷静だ。というのも飯田市は既に、最先端の高速交通網に一気に組み込まれることになる事態を客観的に見据え、さまざまな準備をしている。リニア中央新幹線や三遠南信自動車道の開通自体に焦点を当てるのではなく、「その後のまちづくり」を、長期的ビジョンに基づいた、多角的かつ見事に連関した手法の積み重ねによって同時並行で進めているのだ。

しかもそれらのまちづくりは、リニア開通後の交通便利性のプラス面ばかりを念頭に置いていないところが特徴的だ。あるいは一時的にでも東京〜名古屋間の通過駅になる可能性さえ踏まえた（もちろんそうならないよう



800年の歴史を持つ湯立神事「霜月まつり」

最大限の努力をし、なったとしても盛り返すだけの準備も含めて）、周囲の環境変化に揺らぐことのない自主自立の地域づくりを目指している。

その周到な準備はリニア時代を見据えた「産業づくり」「人づくり」「地域づくり」に大別される。

例えば一つ目の産業づくりについて、牧野市長は「いわゆる安易な企業誘致とは一線を画した、地に足の着いた振興策を心掛けていく」という。ただやみくもに企業誘致に奔走するのではなく、地域に既に立地し、根付いている地域資源としての産業（精密機械工業、関連、水引や革製品をはじめとした伝統産業、農業・食品関連、林業関連、観光関連産業など）を磨き上げ、時代に即応したさらなる競争力の向上を目指している。

象徴的な事例が「飯田航空宇宙プロジェクト」だ。飯田市にはかつて繁栄を誇った製糸業（養蚕・製糸）からの技術移転で起業し成長

してきた精密機械工業や電気電子技術関連産業分野における、技術力の高い企業が集積している。その技術力を土台に今後の成長が予測される航空機産業に着目し、飯田市および下伊那地区の関連企業が結集し取り組んでいる。

「飯田航空宇宙プロジェクト」は、牧野市政1期目の平成18年に立ち上げ、現在、地域企業37社が参画している。航空機部品

の地域一貫受注、一貫生産体制を構築するとともに、展示会などを通じた販路拡大や技術力向上を旨とする人材育成に取り組んでいる（窓口・拠点には牧野市長が理事長を務める公益財団法人南信州・飯田産業センター）。

「この航空宇宙産業クラスターの力をより強固なものとするため、拠点工場を現在建設中ですが、併せて国際戦略総合特区『アジアNO1航空宇宙産業クラスター形成特区』への当地域（計5市町村）の参加も、今年2月に決定しました」（牧野市長）

愛知県、岐阜県、三重県の44自治体（現行）が指定を受けている同クラスター形成特区は、取材後の4月末の時点で、新たに長野県と静岡県含む21自治体（飯田・下伊那の5市町村を含む）が追加申請し、全体65自治体とスケールを広げており、今後の展開が非常に楽しみだ。

また、航空宇宙プロジェクトとは別に、南

(長野県)

信地方の食品関連企業と精密機械工業の企業約30社が集結し、共同で取り組む「飯田メデイカルバイオクラスター」を平成25年4月に立ち上げた（窓口は同じく南信州・飯田産業センター）。

同クラスターは食品と医療機器の2分野の分科会を持ち、地元産の農産物を使った機能性食品の開発や、精密機械工業の技術を生かした高度な医療機器の開発や人材育成を指しており、地元の飯田女子短期大学や医療機関と連携してさまざまな事業に取り組んでいる。

そのほか、市田柿のブランド化をはじめとする農業振興、各種農産品の六次産業化、地元産の木材を活用したエコハウスの建設と活用や木質バイオマスエネルギー資源の利用促進などを目指す持続可能な森林づくり、新交通網時代を見据えた広域観光振興など、リニア時代を見据えた産業づくりの事例は多角的・同時進行的に実施されている。

入口だけでなく 出口も備えた地域づくり

飯田市の地域政策の特徴を「多様な主体による協働」とする牧野市長は、産業界やNPO、市民などの協働による地域づくりを推進している。

東に南アルプス、西に中央アルプスの峰々がそびえ、市域を南北に天竜川が縦貫する飯

田市の自然環境は、今も非常に豊かなまま維持されている。文化の結節点としての歴史は、例えば神楽や人形浄瑠璃などの伝統文化として、今も市民の暮らしの中に根強く息づいているが、さらに独自の発展も遂げている。NHK人形劇『三国志』で知られる世界的な人形美術家・川本喜八郎氏の人形美術館の存在や、世界中の人形劇アーティストが注目し、積極的に参加したがる「いいだ人形劇フェスタ」（毎年8月開催）はその象徴だ。

このように豊かな自然環境の中、独自の民俗文化を継承してきた飯田市民の環境に対する意識は非常に高い。そうした市民意識を背景に、平成8年には地球温暖化対策を骨子とする低炭素社会実現に向けた「21いいだ環境

プラン」を策定、平成19年に環境文化都市宣言を行い、さらに、平成21年には内閣府から環境モデル都市にも選定された。さらに昨年4月には「再生可能エネルギーの導入による持続可能な地域づくりに関する条例」を施行。同条例には再生可能エネルギーを地域住民共有の財産と見なす「地域環境権」が盛り込まれ、現在、同条例に基づく多彩な環境施策・事業を実施している。

その一例として上村地区では小水力市民共同発電事業の実現に積極的に取り組んでいる。

上村地区は平成の合併で新たに飯田市に組み込まれた中山間地域だが、人口減少や少子化、高齢化の急速な進展により、地区内の



NHK『三国志』に使用した人形を中心に展示される「川本喜八郎人形館」



毎年8月開催の「いいだ人形劇フェスタ」



川路地区のメガソーラー



地元産材を使った環境にやさしい住宅を提案するエコハウス



小水力発電(上村プロジェクト)で活用される予定の水源地

する太陽光市民共同発電事業や商店、中小規模の事業所を対象とするE S C O事業を成功させたことに由来する。平成18年度からは環境省のメガワットソーラー共同利用モデル事業によって太陽光市民共同発電所を平成21年度までに飯田市内を中心に162カ所に拡大した。この持続可能なエネルギーの地産地消という仕組みを見事に体現したことが、

保育園を休園せざるを得ない状況になっていった。しかし牧野市長は「ここで休園したら、800年の歴史を誇る湯立て神楽を継承してきた上村地域そのものの存続に関わる」と判断。「とにかく保育園を継続することを決めた」という。

このとき、飯田市では同じ上村地区を流れる小沢川で150kW程度の小水力発電の可能性を見出していた。住民が主体となって事業を立ち上げ、再生可能エネルギー固定価格買取制度によって、この発電所から生まれる電気を売電し、その収益を地域の課題に再投資する「小水力市民共同発電事業」の実現に向けた検討を重ねていた。飯田市では、これまで

上村在住の保護者を対象に、上村地区への定住促進を支援する事業を実施していたが、「もしこの発電所が実現して売電収益を得られれば、その一部を保育園の運営に充てることで、自立的な保育園の運営と存続ができるのではないか」と考えた。

この発想は、エネルギーの地産地消を目指すN P O法人「南信州おひさま進歩」が母体となり、平成16年度に設立した「おひさま進歩エネルギー株式会社」が市民の出資による「南信州おひさまファンド」によって、飯田市内の38カ所の保育園をはじめとする公共施設に、市民ファンドなどで調達した資金で太陽光発電システムを設置し、エネルギーを供給

その後の小水力市民共同発電事業の発想につながっている。

「保育園存続のための仕組みづくりという入口から、市民共同発電事業を活用して財源を確保し、さらにその仕組みを持続発展させ、産業としても成り立たせる出口づくり」にまで至る構想は、リニア時代を見据えた地域づくりとはどのようなものなのかという設問に対する答えもおおのずと包含されている。それはすなわち、市民が自分たちの地域の課題を自分たちの手で発見し、方法を編み出しながら克服していくという、自主自立の精神に則った地域づくりである。

上村地区での豊富な水流を活用した小水力

発電の試み(上村プロジェクト)は、自主自立の地域づくりの一環であり、今後の展開が注目される。

デザイン思考が創る人材のサイクル

産業づくり、地域づくりは同時に人づくりでもあるわけだが、飯田市には人材づくりにおける土壌も歴史的に豊かだ。教育熱心、学習を好む市民気質が江戸時代から続いていることは冒頭に述べた通りだが、その特質は戦後、民主主義教育の推進を目的に全国各地に誕生した公民館における市民活動を通じてさらに厚みを加えていく。それは現在も同様で、飯田市20地区の各公民館には事業の企画運営を担当する70の専門委員会に900人の市民が参加しており、その主力は30代〜50代の働き盛りなのだ。定年後の余暇を使った市民活動という趣はなく、働き盛りの市民が地域活動を率先して実施していることが、この事実一つでよく分かる。

「大都市圏などでは、飯田市で暮らす働き盛りの人々と同世代の、飯田を故郷とする多くの人材が暮らしています。リニア時代を見据えた、自主自立の産業づくり、地域づくりは、こうした飯田出身の有為な人材が再び故郷に帰ろうとしたときの受け皿づくりにもなると考えています」(牧野市長)

それは単に働き口が用意されているというようなことではなく、故郷に戻っても自己実

現可能な仕組みがあるということ。自分たちで地域の課題を発見し、克服する仕組みは、自分にふさわしい仕事を発見し、時には自らそれをつくり、生活を成り立たせて自己実現の道に至る仕組みでもある。自主自立の産業づくり、地域づくりは、そんな人材のサイクル(循環)を実現するための方策ともいえる。

人材のサイクルという意味で面白いのは、平成23年から始まった「学輪IIDA」の取り組みだ。全国の大学研究者や学生が、飯田市を学びの場とする「南信州・飯田フィールドスタディ」などを通し、飯田市や周辺地域とも積極的に交流している。交流による刺激は既に飯田市の次世代育成事業との連携にも表れ始めており、飯田市や南信州に強い興味を抱く研究者や学生も増えつつあるという。実際、これまで見てきたような飯田市の産業づくり、人づくり、地域づくりへの試みは、学際的な見地からも興味津々の事例といえる。

「人口減少時代における地域経営は既成概念を乗り越えたところから出発するべき」との持論通り、牧野市長が牽引する飯田市のまちづくりはデザイン力に満ちている。牧野市長はさらに「行政マンにとつてのデザイン力は事業構想力にほかならない」とも語る。リニア時代を見据えた飯田市の複合的なまちづくりには確かに、入口(構想)から出口(明確な結果)に至る事業構想・デザインが、実に明瞭に見えている。

(取材:文 遠藤 隆/取材日平成26年4月21日)



各地の学生・研究者が飯田市および周辺地区で交流する「学輪IIDA」



老若男女が積極参加する公民館活動